

現場で働く職員に有効なプログラム

森 速人 成光学園 主任指導員

私たち児童養護施設の現場で働く職員にとって「有益」な研修とは、いかなるものであろうか。

研修に参加することによって、私たちはこれまで身につけていなかった、新たな知識や情報を得ることができる。しかしながら、新しい知識や情報を得ることだけで、有益であるとは言えないであろう。

研修に参加した後、「施設での日常」に戻ると、目のさまざまな処遇課題や、雑多な業務に追われ、研修の振り返りをする余裕は

なかなか持てず、研修資料や自分が書きとめた記録は机の引き出しの奥深くにうずもれいき、また頭のなかに「新たにインプットされたはずの知識や情報」の記憶はしだいに薄れていく。

そのようなことが、私を含めた多くの現場の職員が有する「共通の経験」のように思われる。

では、そんな職員にとって「有益だと思える研修」とはいったいどのようなものだろうか、私なりの整理をしてみると、以下の二

点が重要なポイントのように思える。

①研修の内容が、現在自分が直面している課題に対応するうえで有効であること。換言すると、現在の自分のニーズにフィットしていること。

②研修内容が理解・吸収しやすく、実践にすぐに生かせること。

これまで私が参加した研修は数多くあるが、そのなかで「大変に有益だった」と印象に残る研修は、やはりこの二点を満たしていた研修であったように思う。

ただし、①については研修企画者の内容設定が良いだけでなく、その研修に参加することを決めたその当事者（あるいは参加を指示した上司）の判断によることも大きいので（偶然ということもあるし……）研修そのものだけの評価とは言えないかもしれない。

したがって「有益な研修とはいかなるものか？」という命題にたいしての解答は、②の「研修内容が理解・吸収しやすく、実践にすぐ生かせること」ということになる。

そんな私なりの観点で「もっとも有益だった」と思う研修について、紹介をしたい。

前置きが長くなり恐縮だが、あえてもう一点だけ「前置き」すると、私の作文力ではおそらく、その研修によって「私が得たこと」の10分の1も読者の皆さんにはお伝えできないのではないかと思われる。また研修内容のすべてを、与えられた紙面のなかで、正確に紹介することも、やはり私にとっては至難の業である。

率直に言わせていただくと、私が紹介する研修について興味を持たれた方は、このうち紹介させていただく研修の企画担当者、もしくは講師の先生方に連絡をしていただき、より正確な情報を得られるのが一番良い方法であるように思う。

したがって、ここでは読者の皆さんに、その研修についての興味・関心を持っていただ

く「きっかけ」を提供することを目的とした。また、紹介する内容はその研修のすべてではなく、一部であるということをおぼろげに承りいただきたい。

紹介する研修の概要は以下の通りである。

企画担当 神奈川県立総合療育相談センター

1 地域企画課

テーマ 「子どものパニックの基礎理解」

1 『抱っこ法』に学ぶ対人援助技術

術

内容 パニックについての基本的な考え方と具体的な対応について、ロール

プレイで学ぶ

講師

東京国際大学助教授

村井美紀先生

知的障害者更生施設

八王子平和の家職員 阿部優美先生

この研修は主任職員等を対象にした「パニックを起こす子どもの理解と対応」という四回連続研修のうち二回（二回目、三回目）の研修として実施された。

前後の研修（一回目、四回目）は受講者全員参加の規模で実施したのに対し、この研修については二分し、参加者数約10人で実施する形式であった。

くどいようであるが、なぜこの研修が「理解・吸収しやすく、実践にすぐ生かされたのか」が、このレポートの主題なので、まずその点にふれたい。

今回このレポートを書くにあたり、研修後書いた自分の感想を読み返したのであるが、その感想の冒頭にその答えが端的に書かれていたので、自分の書いた文を自分のレポートに抜粋するのは、恥ずかしくもあるが、あえて以下にその部分をそのまま抜粋したい。

まず、二回の研修を通じて、ロールプレイがとても有効だということを、改めて認識しました。そういう意味でもとも理解しやすく、吸収しやすい研修でした。

特に二回目の研修のホルドのロールプレイは、とてもわかりやすかったです！

先だって園内でも、セラピューティックホルドの研修を「ビデオを見る形」で行ったのですが「理屈はわかるけど使えない」という印象でした。

しかし今回ホルドのロールプレイを「経験」して、数倍理解を深めることができたと思います。

ホルドを「される」立場を疑似体験することで、こうも理解が違うのか！と痛感しました。

また「考えて理解」したのではなく、自ら

が体験して「感・じ・て・理・解」したことが理解を深めることができた「大きな」要因になっていると思えます。

この研修では「ロールプレイの手法」が有効に活用されており、感想にも書いてあるのだが、体験をすることによって「感じて理解」できた点が、それまでの研修とは「まったく異なるインパクト」を有するものであった。

感想文の内容について、説明を補足すると、セラピューティック・ホールドについてはこの研修を受ける数カ月前に、その概念と具体的なスキルを学ぶために、タイムアウトと合わせてテキストとビデオを活用して園内研修を実施したのであるが、私も含めほとんどの参加者が「『タイムアウト』は処遇の現場で実際に活用できるが、セラピューティック・ホールドについては、考・え・方・の・意・味・は・わ・か・る・が実際の処遇場面では『使えない』」という感想であった。

しかし、この研修に参加して、実はセラピューティック・ホールドの概念すらも理解していなかったことに気がついたのである。

この研修では、パニックを起こした児童をホールドするロールプレイを行った。

ホールドのパターンは三ランクあり、パニックを起こして、ジタバタしている者を

1 完全に相手を上回る強さで押えつける

2 相手の力よりほんの少し上回る力で、相手の動きに合わせながらも相手の動きを抑える

3 抑えもしないし、離しめせず、ただまわりつくように拘束する

このロールプレイを実施してみて学んだのは、ホールドをされる立場になったときに「気持ちのあり方」がまったく違うということであった。

1と3のホールドを受けた気持ちは、はっきり言って「不快」であった。しかし、2のホールドを受けたときは、ホールドをされているにもかかわらず「心地よさ」を感じたのである。

その「心地良さ」を「感・じ・た・瞬・間」に「セラピューティック・ホールド」についての概念と、その手法の有効性がまさに「瞬時に」理解できたのである。

パニックを起こした子どもを「心理的に包み込む」というセラピューティック・ホールドの概念は、それを「受けてみて、そして感じ」はじめて理解できたのである。

私がそれまで受けたロールプレイを使った研修では、それは「具・体・的・な・ス・キ・ル」を習得するための、トレーニングプログラムであったのだが、この研修では、それ以外に「処・遇・に・お・け・る・概・念・や・理・念」を理解するのにもロールプレイの手法がたいへんに有効だったわけである。

もちろん「具体的スキルを習得するためのトレーニング」も兼ねていたわけなので、すぐに実践につなげることもできたのである。

この研修では、そのほかにも「児童を『受け入れること』と『受け止めること』の違いの理解」や「感情やストレスのモヤモヤを取り除くことで、相手の理性の部分を機能させる方法」また「ネガティブな会話の中から、ポジティブな部分を見いだす方法」「インスピレーションを使って相手を理解する方法」等々、実際のなプログラムが満載だった。

それらはいずれも、私たち現場で働く職員が、日常のなかで遭遇する機会の多い課題について、それに対応するための「理念の理解」と、そして「具体的スキル」を習得できる有効なプログラムだったのである。

また、最後にこれらのプログラムは児童への処遇に対してだけでなく「職員に対しての援助の方法」としてもたいへんに有効であること。そしてまた、私自身がとてもリラックスして楽しめた研修であったことも合わせてお伝えしたい。

このレポートを読んでいただいた読者が、紹介させていただいた研修に関心を持っていただき、この研修に参加される機会を得ることを願って、このレポートの結びとしたい。